

窓辺にて

朝が来たのに夜が明けてなに気分が暮らす
 それはきつと足りないといっただけのわがまま
 ぼーっとしているねと言われたくなくて
 あいつ代わりにお互いの愚痴を交換し合っ
 味も具もないスープを一生かけて飲み干すような
 この感触に本当に意味はあるのだろうか？
 パララの過去と経記した未来に挟まれた
 模様のない今日という日に身に纏う
 こんなわたしの世界には
 ありふれた恋なんていない



詩×絵

窓辺にて

詩：カフユ

絵：八木 優奈

とにしてみました。部屋が近いからこそ、お互い必要以上に踏み込まないようにするための不文律でした。そして、僕は部屋の電気がつけるでもなく、毛布をかぶって眠くなるのを待つ。

話かそれてしまいました。窓についての話でしたね。

べてが嫌になってしまった。

りつげることの意味を見出せなくなって、空っぽな自分ののです。教室の片隅でいるのかわからない存在であるというわけではありません。ただ、何もなかった。それだけ僕が学校に行かなくなったことについては、別に何があった好かれる明らかな女性だという印象でした。

うので直接的な接点ほとんどありませんでしたが、誰からもとなりに住んでいたのは、学校の生徒会長でした。学年が違空権様だけでした。

いえば、となりの家の窓と、その隙間から見えるほんの少しののくらしがなかったのです。とはいえ、窓から見えるものもた僕にとつて、外界と自分をつなぐ情報は、窓から見えるもずと窓の外を眺めています。いわゆる引きこもり状態だったころ、僕は学校にも行かず、空調の壊れた自分の部屋で高校に上かつてはじめての夏の話です。

You outside my window

雨隠 導

文芸×評論

文：雨隠 導
評：峰雪 肇

You outside my window × 窓の外の悲鳴の作用

僕は、目が離せませんでした。いてもたってもいられず、何度も何度も自分の手の甲を噛みました。リビッドにも近い衝動でした。その行為の意味は自分でもよくわかっていません。けれど、鈍く甘い痛みはどれも気持ちよかったです。横形でいっぱいになったところを見ると、なんだか自分の真ん中が満たされたような感覚になるのです。その後と同じような状況はたびたび起こりました。きつと彼女も僕が見ていたことには気づいていたのだと思います。それ

す。と、ふうふうと苦しそうな息づかいだけが鮮明に聞こえてきました。金属が沈んで、鮮やかな赤が浮かび上がってくる。風が風ぐく見てみると、それは剃刀でした。彼女の白い肌ですべらかな持っている何かを執物に自分の手首に押しつけていました。よ彼女はその部屋の中央で、肩を大きく上下させながら、手をおろおろする彼女の部屋のようすをうかがいました。

たのかもしれないと思ひ、よくないことだとも知りつつ、僕は僕の部屋に入ってきているようです。凡帳面な彼女が自分の部屋のカーテンを閉めたいなことがあつたらうか。何かあつたのを見えない夜でした。にもかかわらず、カーテンから光が

毎日がその繰り返しでした。
あの日までは。

「人生とは、自己認識の不可能性からの逃避である」といったのは誰であったか。「じぶん」というこの不思議な存在への問いはこれまで無数の人々の頭の中で浮上してきたことだらう。「わたしは誰か？」という円積法的命題は決まって「じぶん」が弱まっているときの利他的空白に現れてくる。今まで手放しに認めてきた現実が曇って、懐疑に陥り、「我思う故に我あり」などというどん詰まりへ至ってしまうこともあった。そこまで思い詰めなくとも、「じぶん」のかけがえのなきを掴んでいられない宙吊りのような漠とした不安に懊悩するのが一種の青春時代であり、そうした壁にぶつからずに生涯を終えるような者は、現代においては希である。個を規定するはずの集団の中で、「じぶん」がいるのかわからないのか分からなくなってしまう。「You outside my window」の「僕」もこうした苦悶を味わっている。

しかしながら、この物語が閉じられる部分まで至るともはや彼にその色はない。それはひとえに彼が何らかの自己認識に「成功」し、何ものかによって無意識的であれ満ち足りたからに他ならない。従って本稿では、この独自掌編が自己認識の形態を示しているとの想定を念頭に、それが「満足」へと繋がっ

でも彼女はやめようとはしませんでした。だから、僕もやめようとは思いませんでした。

そんな日々がついて、僕はやがてまた学校に行くようになった。校長の挨拶が終わると、入れ違いに彼女が壇上上がりました。僕を含めた全員が彼女に注目しています。僕は今までにない高揚を覚えました。昨晩は眉間にしわを寄せながら手首に刃を当てていた彼女が、今は屈託のない笑顔を浮かべて、すべてを当てたみたいに涼しい顔をして大勢の前に立っている。その事実がどうしようもなくいとおしくて、いとおしくて、僕はおかしくなってしまうのでした。

その後も、袖口をほんの少しまぐつたところにある、まだ乾いていないような傷のことを考えるたびに、鼓動が早まってゆくを感じます。僕はみんなに気づかれまいよう、細心の注意を払いながら、そっと自分の手の甲に歯を立てました。

その瞬間、彼女と目が合いました。彼女は一瞬だけ顔をこわばらせましたが、すぐに壇上用のほがらかな笑顔をめぐりました。た。

僕は自分の血の気が引いてゆくを感じながら、それでも自分の手の甲を噛むことをやめられませんでした。あどきの彼女の怯えた顔は今でも忘れられません。ほんとうに気の毒で、美しく、僕は折るような気持ちでそれを眺めていました。

窓の外の悲鳴の作用

——『You outside my window』

自己を認識するということ

聖んだ交りの始点

いく過程について考えていきたい。本作は、現実と同様に、一人称小説であり、その形式を加味しても自己認識に焦点を当てたことには意味があるように思われる。

学校という舞台設定は、全く独りで生きていけるほど強くはなく、かといって集団の共通性に埋没して安心するほど無神経でもない我々の微妙な性質を明らかにしつつあった。「僕」は「高校に上がってはじめの夏」に「空っぽな自分のすべてが嫌になって」しまう。「教室の片隅にいるのかわからないのかわからない存在」であることに意味を見出せなくなっていた。「僕」にとって外界とは窓の景色であって、しかも「彼女」が帰ってくればカーテンを閉じることにしていた。これはジェントルな気遣いであると同時に裏を返せばプライバシーも守るための防衛行為である。そうした閉鎖空間で自己は、空調が壊れているにも関わらず毛布をかぶるほど脆弱になっている。「彼女」は、幼子が親の仕草を真似るように、手の甲を噛む。そして「自分の真ん中が満たされた」ように感じている。この場面からは、窃視と自己毀損という二つの観念を取り出すことができる。

まず、「僕」は「おそろおそろ」慈から彼女の部屋を覗いている。これは相手に気取られずに見る行為、すなわち窃視である。

我々は知覚の約八割を視覚に頼ってしまっているといわれているが、そのまなざしは多く視物だ。目かあつてしまつて電流が流れたかのようにパツと視線を逸らしてしまつた経験は誰にでもあるだろう。もちろん見つけ合つてもあるが、それは割合的には決まつて少ない。日常は見知らぬ人々との関わりあるいはすれ違ひが多くを占めるし、我々は友達でもない人と目を合ませたまま語らうほど人懐こくはなり得ないからだ。

しかしながら、視視は人々の交流の始まりでもある。一方回的なまなざしを授けかけ、それからそれを双方で交わすようになり、段々その視線が重なり合い、関係が密になつてくる。それが視線による友愛表現の作法だ。実際、「僕」と「彼女のねじれた接点もここから始まつてゆく。

読者を驚かせるのはその後突如として行われる自己毀損である。その意味は「僕」もよく分かつていない。ただ、「リビドーにも近い衝動」だつたと感じている。リビドーとは、主に精神分析学において人の行為の源であるとされる性的欲動のことである。それは理性性によつて抑圧された感性(無意識)でもある。この観点からいえば、意味がわからなかつたということも領ける。なぜなら、手の甲を噛むという行為はまさしく「気持ち」がよいもの、フロイトの言葉を借りれば、現実原則ではなく快感原則の側にあるものであるからだ。

それでは、自己毀損と自己認識とはいかにして結節するか。それを書く前に、「じぶん」についての話を少し広げておこう。

人か人に向ける意識の比重は何かと顔に寄りやすい。我々は人を多く顔で見分けているのだから当然だ。つまり銘々のアイデンティティはそうした必然性をもつて何かにつけ顔に集約しがちなのであるが、我々は自身の顔を決して見ることができない。さらに言えば身体全体を認識することも、どだい不可能である。だからこそ「じぶん」というのは一等身近でありながら不可視なのだ。とすれば「じぶん」は僕でしかあり得ず、しかもそれはつぎはぎの創作物ということになる。換言すれば人は自己を統一的な実体として知覚することができないのである。そうした状況下に置かれた身体への攻撃が一種の自己認識の様相を呈することがある。ピアシング、刺青、煙草、酒など本来身体を傷つけるはずの行為が充足へと繋がる一因にそれがある。痛みは体内のものであれ、「外部」からやつて来るべき現象であるが、人々の行うピアシングや刺青などの肌への破壊は、自身の輪郭を意識させ、物質的にまじまつた「じぶん」像を形成させる能動的毀損なのである。煙草や酒も、血液が身体の表面に押し寄せ皮膚感覚が覚醒することで生まれる安堵をもたらす。つまりは、暴力といつてもいいような身体的負荷を引き換えるに彼らは精神的報酬を獲得しているのだ。

「僕」が行つた噛むという行為は最もフミニティが自己毀損である。このときの「僕」は、秘め事を罪状にいわば「彼女」を大勢の前で磔刑に処したのであり、そして頭の中にはほせてきた甘やかな優越をしきりに反芻しているのである。

「彼女」がそれを見て顔を「わはらせ」た「瞬を抜き取り、快を相乗させている。それは刃を刺突する一瞬において相手と繋がつたように感じ、それを快として追想する通り魔のようである。通り魔ならば警察の手によつてそうした行為は封じられるが、「僕」は犯罪の手続きを継いでおらず、彼の行為は阻害されるべき法的根拠をもたない。「僕」は「血の気が引いてゆく」のを感じたというが、本当に血の気が引くのは読者の側であろう。以降、「彼女の部屋のカーテンがひらいたままになっていることは」なくなつたのだが、その後の「僕」には数々の実現の瞬間を追体験するべく、誰の邪魔も入らない孤独が用意されているのである。

自己毀損という方法

「僕」に輻射せられる「じぶん」の構図

ここまで、自己毀損による自己認識と「僕」の孤独な快について書いた。それでは今一度、「僕」が「成功」した自己認識と快との関係についてまとめたい。

快というのは、自己認識とは重なり合わない。なぜなら、両者は同じ川の側にありながらそれぞれが対岸に存在する概念であるからだ。言い換えれば、自己認識とは「充足」(現実原則)を示唆しているように感じられる。

こうした見方を「僕」に重ね合わせてみると、寸分の狂い無く一致する訳ではないが、「僕」に訪れる第一の快までの仕草を示唆しているように感じられる。

「彼女」が自身を傷つける光景を眺めながら「僕」も自らを傷つけるといつか状況は度々起つたのである。「そんな日々がつついて、僕はやがてまた学校に行くように」(本誌より引用)なのであるが、そこで夜は「肩間にしわを寄せ」て自らを傷つけている「彼女」が「涼しい顔をして」生徒たちの前に立っているのを目撃し、「僕は今までにない高揚を覚えている」。

「僕」の通り魔の心理

三島由紀夫は小さな評論である「魔」の中で通り魔の心理に関して以下のような鮮烈な批評を述べている。

この種の犯罪の実現の瞬間には、大した陶酔は期待できず、むしろ甘美なものは実現によつて確証を得た「最初の観念」の追体験にひそんでいる。

(「魔」『小説家の休暇』二六三頁)

意識の扉を開くこととなつたのである。

無意識的に模倣することによつて、アブヒスナイックな自己認識自然に想起させる。すなわち、「僕」は窓の外にいる「彼女」を損である。噛むことで肌にはりついた菌型は身体の間隙をく

であり快とは「満足」（快感原則）であり、「充足」とは「真ん中が満たされたような感覚」であり「満足」とは「高揚」なのである。

「僕」はもはや自己認識の岸にいない。そのため「空っぽな自分」を嫌になることもない。つまり、自己毀損という歪んだ形での自己認識も幾晩かにおいて擦過したのみであり、「彼女」の首にあるかもしれない「赤の跡」へ観念的接吻をすることを知った彼は、いまや快の岸に立っているのである。これこそが、初めに述べたところの「逃避行」なのだろう。

「じぶん」はこの兩岸を往来する。

You outside my window

しかしながら、自己認識の岸から快の岸への渡し船は「僕」のような形であるとは限らない。身体への負荷も顔をこわばらせた相手への優越も必要不可欠では無論ない。「僕」と「彼女」との交わりは、肉体的でありながら極めて心的で隔絶的なものだ。穿った見方をすれば、その交わりは「僕」の頭の中での出来事である。「彼女」は、文字通り「窓」の外にいる。

ただ、窓は窓だ。その見えない壁を超えて、あるいはその透明な壁を壊して、「僕」が「彼女」に触れる、そのような純なる交流の未来も残されていることを我々は忘れてはならない。

本作を読むと、精緻な筆力でしたためられた敬虔で背徳的な「僕」が身体に染み渡ってくる。ついつい妄想世界に浸ってし

まい、読者にも外界が「僕」という閉ざされた窓を通してしか見えなくなってくるのだ。そうした物語との一体感には珈琲のような中毒性がふんだんに込められていて心地がいい。

だが私はあえて信じたい。「僕」が聞いた「彼女」の息遣いは幻聴ではなかったのだと。風が凩いだとき「僕」に届いた「彼女」の悲鳴、その受け取り方は他にも有り得た。「彼女」は「僕」に助けを求めていたとも考えられまいか。その実、窓は既に、開いていたのではないか。（峰雪肇）

〈参考文献〉

三島由紀夫『小説家の休暇』新潮社、一九八二年